

會



報

昭和 18 年 10.11 月

127

日 本 山 岳 會

横倉山

吉永虎馬

横倉山は高知縣高岡郡にあつて、其山群は越知町、別府村及大桐村等に跨つて頗る廣大なる地域に亘り、其最高峰は約一〇〇〇米に達してゐる。然れども其原始林に蔽はれて史蹟名勝地として、將珍奇なる植物の多きを以て著名なるのは僅に其東方に向へる一部分であつて、高も八〇〇米内外に過ぎぬのである。抑も此山名はどの地圖上にも一として表はれて居ないが、其特に有名なる所以は古來安德天皇御陵墓參考地として宮内省から指定されて居る地點の存在と、地方尊崇の中心である神社の奉祀されると、又山中原始林中には稀有の巨大なる老杉が矗々として天を摩せると及石灰岩及閃綠岩よりなれる大絶壁の奇勝と所生植物の豊富なるを以てである。就中此山名を邦名として命ぜられたる植物に「ヨコグラノキ」「ヨコグラブダウ」「ヨコグラツクバネ」「ヨコグラヒメツラビ」「ヨコグラタケ」等があり、又學名を附せられたるものも Plagioclila yokogurensis Stephani, Puccinia yokogurensis P. Hennings 等がある、尙富山にて初めて發見されて學界に紹介さ

れた新種植物は甚多數ある。次に私の郷里の漢學者が昔作りたる同山の紀行文一篇を左に掲げて見ることにする、多少誇張されて居るのを免かれないが、現時も大體に於て大差がないのである、兎に角地方に於ける一小山に過ぎないけれど種々の點に於て優れた點がある奇山なので、餘白をかりて紹介する次第である。

登横倉山記 迂齋 山本 謙

遊吾佐川者。莫不稱横倉之勝。而其登覽者。亦皆莫不樂而忘勞也。山在于佐川越知村。業延于別府大平諸村。如屏風列峙。翠然擎天。不知幾千仞。衆峰群聳。悉皆在下風。其氣勢之雄。使人懦懷喪膽。有大川繞麓。發源豫州。百餘里而入海。水清徹。底可澈可濯。此山距余家十里而遙。曩余攀涉。適病後軟脚。遊覽未遍而歸。爾來恒願再遊而未暇也。今茲壬子夏竹村東野。自遠方來。主余家。曰。明晨將登横倉山。子亦盡往遊焉。言未畢。余心躍然矣。翌早鑽燧晨食往。過柳瀬河内等村。逶迤婉轉乎岡阜郊原之間。而取路楠神村。乃攝衣穿窄徑。磴道數百級。峻不可言。仰瞻則天隅之殘星。猶未沒。俯瞰則麓底之旭日。始騰耀。捫蘿絕葛。最屬而登。雲霞變繞足而生。路迂榮當胸而起。有古杉鬱葱數十圍。日光不能燭。地濕苔滑。陰風瑟瑟。人。時維四月。單衣不能勝也。抵此纔山半腹也。有祠稱中宮。結不構美。屋垣頗存古觀。相偕拜奠畢。小憩午食。自是沿谷而行數千步。至絕頂。則有祠在巖上。號御嶽。是爲本宮。合下宮總呼三祠。曰横倉權現。夫此巖石則立數十丈。雜木叢生于石罅。皆無土而化。輪囷曲曲。葉葉染嵐。特爲可愛矣。境最幽邃。常貯大古霧。不可以久居焉。土人云。此巖上天將曉之頃。有赤旗飄焉。邦俗驅蝗用白旗。山下民自古忌白旗。亦必有故也。東野年已知命。寫履輕捷。忽聞吟哦之聲。顧則立巖頭睥睨崖腹。余見之戰兢。滿身生栗。乃勸之去。一將見巖下洞穴。而徑尤危險。左右絕壁。越越難進。擇地可以投步。纔至則洞口有風。冷氣特沁肌膚。其口甚隘。僅入一人。稍入則可坐數人。而穴深不知幾尺。土人稱平家洞。東野跳入闇黑。以不持燭。半途而出。余嘗登時見樹間有荒墳。土人相傳。壽永之役。安德帝潛匿處。及崩即葬焉。竊謂虛實難知。且導東野復一過焉。又聞之土人。山中有調馬蹴鞠之場。其跡歷歷。余昔遊時嚮導告其處。視而過。乃往而見。是數畝之地。生草棘。而側有躑躅花數株紅色撩人。余謂東野曰。土人之言。未可信也。若然則身居元后。而宇宙間無所容一步。僅以深山窮谷。爲行宮。而空境無人處。跨鞍跳丸。豈不傷乎。於是相俱慷慨。意氣勃勃。不覺注淚躊躇。余感東野富勝具。又謂之曰。

普動嶽諸勝。皆不甚遠。何不一注見之乎。東野曰。食多而疎。不如寐而密。今草率見之。所謂涉獵焉耳。且日將逼暝。乞俟再遊而詳之。乃舍舊路取捷徑而下。訪小田氏。橫倉山廟令也。藏寶劍古器數品。乞觀。有老婆以主翁幼辭。爲恨。是夜東野宿小田氏。余若飲未暇深語。乃取舊道還家。嗜余是遊也。非東野自遠方來。惡得償再遊之志。至再遊則覺山水之樂更有味。於是始信讀書一之不如十之。百之不如千之其味愈無窮。又況有明自遠方來。其爲樂何如哉。

目次

- 横倉山……………吉永 虎馬……………一
- 登山年譜資料管見(六)……………二
- 三株山……………沼井鐵太郎……………二
- 高原散村……………行方 沼東……………五
- 飯豊山の讀み方と語源に……………六
- ついて……………上田 勇五……………六
- 會員通信……………七
- 沼倉寛二郎・川喜田壯太郎……………八
- 切抜帳―西北地域開發……………八
- 會務報告其他……………二〇



登山年譜資料管見(六)

沼井 鐵太郎

○明治以前の積雪期

登山棟記(一)

筑波山

木暮會長は「登山五十年」に筑波山を萬葉歌人の歌から拾ひ上げて「今は冬で雪があり、登山には眺向きではないが、見過して行くのは心残りであるから、雪消の山道に悩みながら登った。と、國人は歌つてゐる」といつてゐられる(山岳三十六年二號六頁、昭和一七、六)。

之を以て觀れば既に三千年の昔我が國民の間に廣義積雪期登山が遂げられてゐた事が想像出来る。假令山は筑波の低いものでも、又雪量も著しからずと考ふるにせよ、神の山を敬ひ親しみ、雪路を恐れなかつた上代人の心構えを、我れ等子孫は誇りを以て記したい所である。

白 山

儲て然らば大和民族が高山積雪期登攀をした最初の記録は如何。役小角の大峯入り、富士山、英彦山開山等の事蹟考證は暫くをき、

皇紀千三百年代には立山、妙高山、白山、四阿山、金峰山、石槌山等が開山せられてゐるが、此の内白山に季節等最もはつきりした記録が残されてゐる。

養老元年(皇紀一三七七年)四月越前的高僧泰澄三十六歳の時、加賀白山(二七〇二米)に初登頂す(大正四、七)四四三—四四七、元亨釋書より引用せる文中に曰く、「養老元年四月、澄往白山麓大野隈、乃專心持念、天女又來曰、吾是伊非諾尊也、今號妙理大菩薩、此神岳白嶺、我主國之時都城也(中略)吾真身在彼天嶺、大德往見之、言曰天女乃隱、澄乃登白山天嶺絶頂、居絲絲池側、持誦專注、忽九頭龍出池面(中略)澄又渡左澗上孤峯、值一偉丈夫、手握金箭、肩橫銀弓(中略)澄又昇右峯、見一奇服老翁(後略)」。之によつて觀れば純然たる積雪期(冬山)ではなくとも、春の豊富な残雪を踏んでの登行らしく、同時に又白山御前岳と大汝峯、別山三峰共に登頂して本

邦高山登山史上不朽の名をとめてゐるのである。

「管東望白山、有所觀、更有禱白山比咩神社、而坐妙法石室、以待山間雪堆、蓋爲登攀不失道也、養老三年有感靈夢、遂率徒弟隊行者淨定行者二人、傳積雪高處嶺嶺面上、竟得達絶頂、數月苦修始開此山、祀白山比咩神、係其七月二日也」。此は前記著書引用の白山遊記に記す。此の文で觀れば春雪雪崩の落ち切るのを待つて登頂し開山施設に及んだ周到な計畫がうかゞはれる。養老三年泰澄並に徒弟二人の一行の登頂が二度目のものか、或は同一事蹟が書物によつて書き方が變つたものか。又一説に既に養老元年よりも百七十年以前の欽明天皇の朝に大山祇を祀つたといふ事が考證されてゐる(石川郡三宮實記)。いづれにせよ今から凡千二百二十年前に最早本邦高山の踏雪行登山が實行されてゐた事はたしからしい。其してそれが記録されてゐる舞臺は本邦中積雪夥多な地域の一である加賀の白山であつたのである。

日光男體山

白山に次で史上に燦として輝く積雪期初登の業績は、勝道上人の日光男體山の試登並に登頂開山であつた。本業績は茂木慎雄氏及び武田久吉博士の考證研究に詳しい。

(山一一)(昭和九、一)一〇—一五「入峰禪頂・船禪頂」及び山岳二十九一年一號(昭和九、六)一〇五一—一三頁「勝道上人と日光の開山」、武田久吉編「尾瀬と日光」(昭和一六、八)一八一—一八二頁、「山岳講座」八(昭和一一、七)一八、木暮理太郎著「山の憶ひ出」下巻昭和一一、六〇五四五等參照。

「神護景雲元年(皇紀一四二七年、西曆七六七年)四月十日に、上人は絶頂を見ようと思ひ立ち、精進念誦すること二十七日、彌々出發して高嶺に攀ち躋り、四十里許りも行くと、嶽の半腹に一大湖のあるに出會つたので、湖の北岸に宿つて先づ經行念誦し、やがてこの頂上に登らうとした處が、路は險しく深雪嚙々と横はり、雷吼振動して更に上ることが出来ないで、遂に半腹から還り降つて湖畔の假宿に住むこと三十七日を経、終に五月十三日に四本龍寺に戻つてしまつた」(武田博士の文より)。

陰曆四月は太陽曆五月中旬に當る。やはり純然たる冬山ではないが、踏む所悉く雪で土又は岩を踏む只の夏山では勿論ない。不撓不屈、信念に凝りかたまつた勝道上人は更に十四日目に再舉を計り、天應元年(皇紀一四四一年、西曆七八一年)四月上旬(太陽曆五月中旬)登りにかゝつたが「霖露霰霰とし

て降ることを得ずして空しく引返した。以上が二回に渡る男體山の積雪期試登である。

斯くて天應二年(皇紀一四四二年、西曆七八二年)三月、「先づ湖畔の宿に到り、精勤修行すること十七日、遂に山頂に達して素志を貫徹したのである、一行は湖畔の宿に降つてから、機動修すること三箇日、事畢つて四本龍寺に戻つたのである(中略)上人は四十八歳であつた」。此の年正月が閏だつたので、此度も新曆によれば五月中であつた。上人の法悦は如何ばかりであつたらう。又此の際同伴した御弟子さんは道珍、勝尊、教旻、仁朝等であつた。越えて三日の延暦三年五月にはこの勝地に神宮寺が建てられた。

輪標最初の記録

桓武天皇の御宇、延暦二〇年(皇紀一四六一年、西曆八〇一年)坂上田村麿が蝦夷征伐の折、出羽の國北浦に向ふ途中で大雪に行手を阻まれ、困難の際土地の顔役中山某なるものが細竹を輪にして荒縄で笹げた標を獻じてこれを助け、冬の征伐に大いに役立たした。歩行一〇—一二(昭和一一、二)一一所載、田中正二「スキー界の轉機點に立つて想ふ」。登山で使つたのではないが、兎に角ワカンジキ最初の記録であらう。

鶴見山

清和天皇の御宇、貞觀九平（皇紀一五二七年、西曆八六七年）九月二十七日條に「太宰府言ふ、從五位上火男神、從五位下火寶神の二社、豊後國遠見郡鶴見山嶺に在り、山頂に三池あり、一池は泥水色青く、一池は黒く、一池は赤し、去正月廿日に地震動して、其聲雷の如し」といふ記事があつて山上にお宮のあつたことは明かである、從つて登拜者のあつたことも察せられ云々と木暮理太郎氏は書いてゐられるが（「山の憶ひ出」下巻五三五—五三六、山岳講座八卷一—一二）、九州の地とはいひながら既に神社が山上にあり、舊正月廿日に山上の異變のあつた事が報ぜられてゐるならば、積雪時登山も有り得たではないかと思つて茲に記し、今後の研究を待つ次第である。

島海山

前項と同じ文獻から同じ疑ひで掲記する。貞觀十三年（皇紀一五三一年、西曆八七一年）『五月十六日辛酉、是より先出羽國司言ふ、從三位勳五等大物忌神社、飽海郡の山上に在り、巖石壁立し、人跡到る稀なり、夏冬雪を戴き禿して草木無し、去る四月八日山上火有り、土石を焼く、又聲有りて雷の如し、山より出る所の河、泥水泛

溢し、其色青黒にして、臭氣充滿し、人聞くに堪へず」といふ記事がある。之は島海山の噴火を國司の奏聞したものであるが、同じく山上にお宮のあつた事が知られ、且つ人跡到る稀なりは人跡到る無しではないから、稀であつても登拜者の絶無でなかつたことを語るものである」と木暮氏は書いて居られるが、山上に神社あり、地は積雪量豊富な奥羽である事を考へれば、前出白山や男體山の初登行程度の積雪期登山が無かつたとはいへない。九州鶴見岳以上に筆者はこの疑ひに興味を抱くものである。

富士山

富士登山を説明し得る最初の文獻は都良香の「富士山記」であつて、此は清和天皇の御宇、皇紀千五百年代の初期に刊行されたのであるから、其れ以前即ち一五一八年前に既に富士登山が有つたものと見てよい。然し乍ら確實なる最初の登山記録は久安五年四月十六日（皇紀一八〇九年、西曆一四四五年）末代上人の登山と見るの外はない。（本朝世紀に取る、佐藤太市「富士と大和民族」〔昭和一四、七〕一一四—一一七）。そして舊の四月といへば太平洋岸の富士山でも残雪豊かで、廣義の積雪期登山と見る事も出来やう。末代上

人こそ富士登山を國民行事少くとも信仰登山行事に取り入れた開祖と申してもよく、以後各講中結社が發達し、救國の熱血漢指導者日蓮上人なども山麓に山頂に法跡を遺してゐる。斯くの如く登山者が多くなつたゞけに穗雪期登山も此の時代、文永六年頃（皇紀一九二九年、西曆一二六九年）に一二はあつたらうと想像される。

今對照上歐洲の登山史から最初の冬期登山事績を擧げて見ると、ダンテは西曆一三一年冬ブラト・アル・サグリオといふ千五百米の山に登山したといはれる（M、シュヴァルツ著、近藤等譯「山岳登攀史」第二章登山の元祖、一山と溪谷七四〔昭和一七、七〕）。從つて歐洲の登山よりも我邦の登山の方が雪の山でも開拓が早かつたと言ひ得る。アルプスの高峰登攀はもつと後世である。富士やアルプスの登山に關しては調べてゐる方も多いと思ふので、一つ本統の富士登山登頂最初の記録をお互に見つきたいものである。

日光奥白根山

山岳三年一號（明治四一、三）五一頁に高野鷹藏氏は「頂上には石にて圍んだ唐銅の小祠がある、其の屋根に永徳元年十二月云々の文字が刻してある、今を距ること五二七年……」と記してゐるが、

實際奉納登山が其の年（皇紀二〇四一年、西曆一三八一年）十二月であつたならば、正に冬山の装ひであつたらう。

島海山

享和煙氣見聞記に曰く「寛政十二年庚申冬より、山上の白氣馬の尾のごとくなびくも、深く心をつけしものなし、翌一三年辛酉三月八日、衆徒登山見分するに、荒神が嶽（山上の一峯）の邊八ヶ處煙立ちありしと、七月一日予も同行四五人にて登山……夫より七高山に至らんとて行くに……六日荒瀬郷の者共十二三人參詣、七高山へ行かばやとする道にて、谷下より燒拔け、八人の若者石に打たれて散々に横死、堂番の衆徒に聞くに予が參詣の折よりも百倍も強かりけるとなり……十三日又山上燒拔け……十日許も過ぎて少しく煙薄らぎければ、何時の間にか七高山と荒神岳の間に新山を生じたり云々」（魯樹桐著「日本之山水」、大正四、七三三—三三五に據る）。

右によれば寛政十三年（皇紀二一三二年、西曆一四七二年）三月初旬に登山してゐるが、舊三月といへば勿論積雪期、前出貞觀十三年（一五三一年）五月よりも眞の冬山に近いといふべきである。引用句は必要以上に茲に記したが、遭難記事並に火山史として注意を

要する記載なるが爲である。

本邦スキー前史の一節

「天文年間（皇紀二二〇〇年頃）弘前に築城した初代津輕藩主が浪岡城主北畠泰房攻略に當り冬の進撃に穩様の曲材を兩足に結び付け戦果をあげたと云ふ」（「歩行一〇—二八昭和一八、二」二一所載、田中正二「スキー界の轉機點に立つて想ふ」に據る）。前出輪標の項と共に參考掲出。

武田軍勢の南アルプス越

山小屋一二三（昭和一七、三）四八—五九所載平賀文男氏の「武田信玄の南アルプス越えについて」といふ一文は甚だ興味深く讀んだが、其の内季節の明かなものに永祿十二年（皇紀二二二九年、西曆一五六九年）四月二十七日夜北條氏政と對陣の薩埵山より一夜の裡に安倍峠（一四一六米）を越えて引上げた事、及び元龜二年（皇紀二二三一年、西曆一五七一年）二月及四月遠州攻めに原隼人正の一隊をして水無峠（二一〇〇米、沢ヶ岳の南）を越えしむといふ記事がある。前者は高度も低いし時季も舊曆四月末であるから夏山と考へても、後者は南アルプスの二千米以上を少くとも眞冬に一回越えてゐるのであるから、或は之を以て積雪期山岳戦の嚆矢と見てもよいかも知れぬ。世には次項の佐

々成政の針木越が有名で、之を以て歐洲ハンニバルやナポレオンのアルプス越に比し、本邦積雪則山岳に於ける軍隊活動の最初と考へられてはゐるが、平賀氏の報告によつて、此の概念は修正されるやうになるかも知れない。原軍人正の水無峠を越えた當時の積雪及行軍状態が知りたいものである。

大菩薩峠・將監峠

なほ信玄の息武田勝頼は、天正十年（皇紀二二四二年、西暦一五八二年）大菩薩峠・將監峠を越えて秩父に逃れんとしたが果せず、大菩薩峠南麓の天目山で自害した（前記平賀氏記載に據る）。此の史實によれば、大菩薩、將監の二つの峠道は古來間道として開かれてゐたものであらうか。さすればいづれも高度千八百米を切つて冬時積雪相當な此等間道を里人か旅行者が越えた事も有り得たであらう。

佐々成政のザラ峠・針木峠越

天正十二年（皇紀二二四四年、西暦一五八四年）十一月、富山城主佐々内藏助成政越中國より従者五十四名と共にザラ峠及び針木峠を越えた。此の事績は有名で既に記された記事も少からず、登山史的検討は又別の機會に於て試みたい。只注意すべき事は、此の行が新雪の嚴冬初期であり、其の季節

に大部隊を以て高度二千五百四十米の針木峠及冬季の黒部峡谷を越えた事實は、史上嚆矢の壯舉であつた。越中古實記、東遊記、川角太閤記、富山史、信府統記安藝の條、前項平賀氏文獻、山岳十一年三號（大正六、九）一四一木暮氏文獻、最近黒部奥山に關する中島氏文獻等参照。

北越銀山平

三田尾松太郎氏の著「幽山峡谷」（昭和一七、四）一八一―二六頁には、銀山奉行依田五兵衛の身内松田喜治衛門の手書を紹介し、明暦・元祿の年間北越の銀山平が鑛産開發された事を記してゐるが、其内に「越後國魚沼郡上田銀山の儀越後中將殿領知の節折立村源藏と申百姓山見の節同國大澤村藤右衛門と申鍛冶に銀石爲吹候所依爲銀石中將殿へ注進依而明暦三丙春初而中將殿普請被申附銀被爲候」といふ文字がある。明暦三年は皇紀二二一七年、西暦一六五七年であり、今から凡三百年も以前から銀山平に稼業越冬して探鑛した事がうかがはれる。従つて魚沼の山々谷々は積雪時も相當踏破されてゐたのではないかと思はれるのである。

長白山定界碑建立の登山

鮮滿國境の長白山又は白頭山（二七四三・五米）の登山記録は、金史に「昭祖羅武至于青嶺白山」と記すのが其れとすれば今から一千餘年前即皇紀千六百年頃といふ事になるが、はつきりした朝鮮側の記録では、世宗の朝（皇紀二〇七九―二一〇一年）西暦一四一九―一四五〇年の或る年北極の高度を測定する爲磨官を摩尼山、白頭山、漢孝山に登山せしめたのが最初の如くであり、白頭山へ登つた人は恐らく崔天爵であつたらうと傳へられてゐる。支那側では清の聖祖即康熙帝の治世十六年（皇紀二三三七年、西暦一六七七年）内大臣吳木訥耀色の一が六月三日吉林を發し十四日間を経て山頂に達してゐるが、此れは夏山であらうと思はれる。次で同帝の五十二年（皇紀二三三二年、西暦一七一二年）清國より烏喇總管穆古登、朝鮮國より差使官朴道常などが惠山鎮より登山し、五月十五日山頂の南東凡四軒の地點に石碑を建て、標識とし之により天池及最高峰は完全に清國領内に入つた。此れが即ち定界碑の建立であるが、時季は五月上中旬で残雪も相當あつたらうと思はれる。果して積雪期登山といへるかどうか、筆者は北鮮の山を全然踏んで居ないし勉強も足りないで、該方面權威諸氏の御高見をうかがひたいと思ふ。

なほ以上の事績は地理學九卷三號

（昭和一六）四四二―四四三頁に據つた。

阿波國銀山

山岳四年三號（明治四二、三）七六頁に據れば「坊の前は廣くして鐘あれど樓なし、銘に大篠劔大權現、安永十辛丑三月二十七日、別當利劍山龍光寺後、中興開山權少僧都密幢光」とあり、安永十年（皇紀二四四二年、西暦一七八二年）既に開山せられてゐた事がわかる。但當時（舊三月）積雪中登山ありしや否や。

富士山

「不二の登山は、毎年七月十五日に始まり、九月十日に終る、今より一百年前、春季に登山を企てたるものあることを、ジャバン・メールの記事に見たることありしが、近代春季と冬季とに登山したるは野中至氏なるべし」。此れは一寸出所の記載が洩れたが、一方ウェストン著岡村精一氏譯「日本アルプス登山と探検」（昭和八、一）二二三頁を見ると、「ジャバン・メールの編輯者は、二十五年程前の春山へ登つた一行のことを語つてゐる。併しかうした冒険はその後殆ど繰返されてゐない」とあり、大體符節を合するから、ウェストン師の頃から換算して幕末最後の年即ち慶應三年、皇紀二五二七年、西暦一八九二年の頃となる。

或は又前記載の百年前といふのから換算すると皇紀二四七〇年、西暦一八〇〇年となる。いづれにせよ幕末に少くとも一回は春季富士雪中登山があつたやうで、其れは果して如何なる人であつたらうか。

松浦竹四郎のマツカリス

「今茲二月（中略）四日天未白、著鐵楊而攀、登四分、日漸出、九折而進、刀風刺面、然汗流浹背（中略）午後漸達山巔、巔如富嶽而四、週廻一里半許、冬日熊蟄山中、土人待春而獲之云（中略）四顧則崑崙在西、岩内、古平嶽在北、支骨、察、峴、垂舞嶽在東南、而松前、江指、函館之諸山、出沒於雲烟之際。此は碧梧桐著「日本之山水」（大正四、七）九二頁にある松浦竹四郎のマツカリスアリ登攀記で、明治維新前（年代未調）の特筆すべき積雪期登山である。最も雪量豊多な舊二月の季節といひ、案内の土人（アイヌ族）を連れたらしいが、鐵楊を著つて攀ぶところからには金標即ち一種のシユタイグアイゼンを登攀具に用ひたなどを見れば、我々が後世歐米流の冬季登山を充分な用意の下に行つて先驅者振るのは松浦氏の如き大先輩に對して取べきではあるまいか。松浦氏の探検登山事績並びに其の裝備用法に關する研究調査は別箇に始めたいものである。

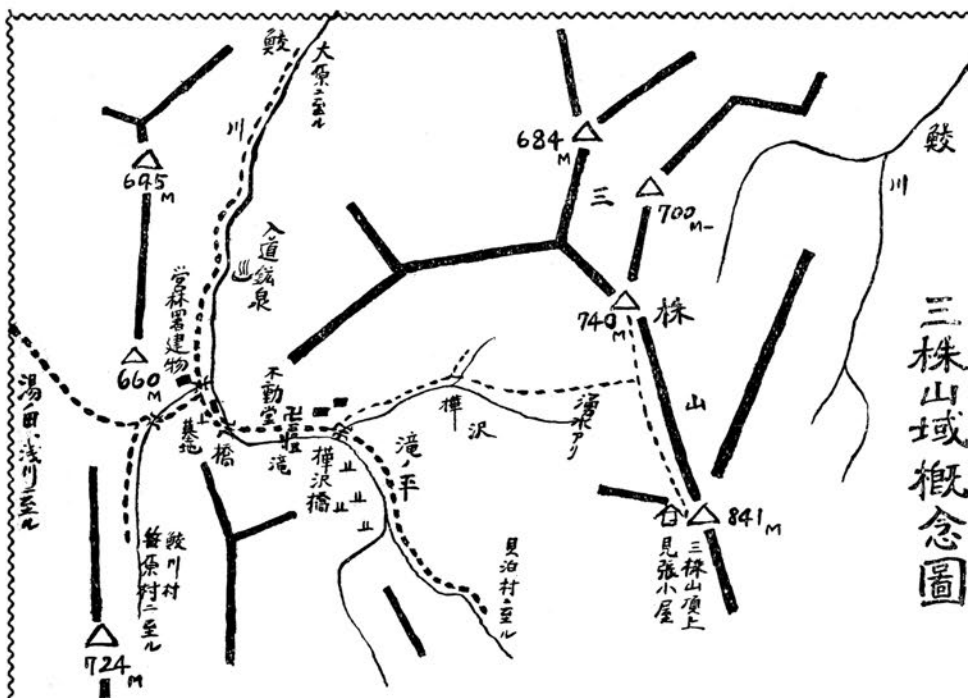
（未完）

三株山

行方沼東

阿武隈高原警城の南部には八〇〇Mを超える峯頭が少ない。殊に

三株山域概念図



鮫川流域の南北一帯は大凡六、七〇〇Mの凹凸でこれとその山容を指し得らるゝ山は誠に備である。三株山はその僅な中であつて、最も廣潤な山頂をもち和かに美しいものゝ一つである。南北二キロに

及ぶドーム型の頂界線と稍東西に延びた芝生の頂とは、この山を遠望する者に深い印象を與へずにはおかない。鮫川はこゝに一部の水源をもちその西北を迂回して大原に於て本流に合してゐる。登山口は、兩側の山が迫つてよい溪流をなしてゐる。入道には只一軒の鑛泉宿がある。瀧ノ平の養林署の建物のあるところから左の澤に入り南に辿れば香露、羽貫を経て笹原村に至る。またイタヤの二本ある分岐路を、西へ八キロ程で湯ノ田鑛泉に至る。湯ノ田には西島、鈴木木の二旅館があつて入湯宿泊が出来る。この鑛泉は湧出は豊富だが低温なので加熱してゐる。そこから水郡線の淺川驛へ更に十二キロである。瀧ノ平から御齊所街道の大原まで六キロ程この街道には石川・湯本間のバスが現在も運轉してゐる。三株山は何れからするにも可成り不便な位置にあるが、山上は一帶の草原で阿武隈南部に於ける一大展望臺をなしてゐるので、その不便を忍んでも登るべき山であると思ふ。頂上三角點から少し離れて小屋が一軒建ててゐるが、もとの地方山火事の見張所に用ひたものといふ。それ位によい眺望が得られるのである。頂界線上には土手が巡らしてあつて、

宮本村の馬の放牧場となつてゐる。草に交つてイチゴが繁茂し五月はその果が食べきれないといふことだ。それにも一つワラビが多く出ていることも注意をひく。夏日馬の涼み場とするために、クリ、ナラ、ヤシヤブシ(この地方ではヤシヤと呼んでゐる)等が所々に残されてゐてそれがまた單調な草原に變化を與へてゐる。水も豊富で中腹以下から絞り出る小流れがさゝやかな音を立てゝ草の中を流れてゐる。上信の神津牧場より一層牧歌的で開闊雄大さをもつ草原といへる。阿武隈中部の大瀧根山や萬太郎山も廣い山頂をもつてはゐるが、この山程奇麗ではないし廣くもない。三株放牧場となつてゐる山城丈けでも五百町歩位はあるといふ。秋は長い尾根の上に清楚なウメバチサウの花が點々と綴られ中腹以下の潤葉樹林では落葉が拾ふ人もなくこぼれてゐる。

その登り口は、瀧ノ平の不動瀧の少し先に樺澤橋といふ土橋がかかる。つてゐる(五萬分の一竹貫圖幅三株山の西北に入つてゐる澤で瀧ノ平の瀧の字のあるところの澤)。橋の角から左へ樺澤沿ひに四五十分登つてゆく。潤葉樹の間に長い草尾根が見えてくる。その邊は林を切り開いてある。親馬が仔をつれて草を食べてゐるのに出會だらう。澤は右の頂上寄りに入るものと、登路に沿ふものと二つに分れる。左の澤に寄つてゆるく登ると左側の露岩があるところで道が二分する。左へ炭焼小屋のある方向に行つても暫く潤葉樹林の中を分けて尾根に出られるが、頂上へ遠くなるので右へ行くのがよい。湧水でじめ／＼してゐる黒土の道には細い踏跡がついてゐる。栗の木のあるあたりから草原が尾根までゆるい勾配で廣り爽快極まりない。眞直に登ると一ヶ所草がはげて水の浸み出てゐる場所に出る。それから猶一直線にぐん／＼草を分けてゆくと尾根の上に取付いて仕舞ふ。低い土手が築いてあつてそれに沿ふよい道が右の頂上に向つてゐる。凡そ四十分位で坊主頭の頂上に立つことが出来る。標高八四一・八Mの三角點は左に寄つた村の石祠の祀つてある後ろにある。山頂では那須、日光、上州の山々が八溝の上に現れ右の方へ順に磐梯、安達太郎、吾妻の群山を見る。南は和尚、猿ヶ城等常北奥多賀の連山、北は一番近く明かに夏井川と鮫川の挟む高原帯で大芝山(七三四M)大佛山(七六七M)芝山(八一九M)大黒山(七八七M)雨降山(七七〇M)をそれと指稱し得られる。更に北に蓬田岳は優美な姿を見せ大瀧根も廣い根根を

現してゐる。右へ凹凸のない頂界線が長く延びて神樂山、吃鬼屋、猫鳴に續く。東は湯本の湯ノ岳まで延びてゆく山々が近くそれらは眺めても飽かぬ磐城の高原である。樺澤口の外にも登り口はあるが、これがまづ代表的であると思ふ。

阿武隈の山といへば總てが準平原にまで扁平化されて仕舞つたものが多いのであるが、三株や大佛や水石山はそのうちでもまた扁平な山頂をもつてゐるものである。山頂一帯の端麗と展望のよさからいふならば三株山がその首位に置るべきものであると云へるであらふ。

(参照 二十萬白河五萬竹貫)

高原散村

行方沼東

やまどりしだの群れ生ふところに陽は洩れてその一ところほつきり黄色し

やゝ濕る谷間の土に散り敷きていまだ新しなごたかうじゆの花

下りゆく潤葉樹林の水溜りをたからかうの花梗太しも

うめばちさう群り咲ける頂にわれいま立ちて磐城の山見る(三株山)散村の墓原道に標あり中支戦線散華勇士と書れたり

標指す墓の在所に禮しつゝ高原散村わがひとりゆく

深山木に交れる朴は落葉せり阿武隈高原秋深みかも

七瀧の瀧壺にして荒々し大樹引掛りて木膚裂けたり(花園山七瀧)

流の上に更に重る瀧ありて風捲き起し奔流落下す

苦生ふる社の庭は暮れ早く大杉林尾根に及べり(花園神社)

石南採取の制札立てり宮前の老杉太く根を張るところに

「飯豊山」の讀方と語源について

上田 勇五

五萬分の一陸測地圖「飯豊山」(新潟五號)には、飯豊山に「イヒデサン」と云ふ振り假名がしてあ

る。飯豊をイヒデと讀ませるのは確かに奇妙である。以下之について、私の目にふれたもの、耳に聞いたこと、頭に浮んだこと等について書きとめてみる。

(一) 山麓ではこの山のことを「イヒトヨサン」と云ふ人がかなり居る。しかし最奥の部落たる彌平四郎や、長者ヶ原では「イヒデサン」と呼ぶ。しかも「イヒトヨサン」と言つてもよく分るのである。これらの土地の人に聞くと「イヒデサン」が正しいのだと言ふ。

(二) 柳田國男氏著「豆の葉と太陽」三十五頁には「此邊は飯土用村である。飯土用と云ふ地名は東北に多い。何か信仰に關係がある地名と思ふがよく分らぬ」とある。

(三) 飯豊山には飯豊神社が祀られて居り、この社は飯豊講なる講中を持つて居る。これと福島・會津若松地方では中々盛で、講中の代表者は毎夏必ず登山してお詣りすると云ふ。八月に飯豊に登つた私の友人は、白衣姿の登山者の多いのに驚いて居た。東北地方にイヒドヨ又はイヒデの地名が多いのは、この講中に關係して居るのではなからうか。

(四) 東北各地で、私の氣のついたこの地名の所は次の如くである。

岩手縣「遠野町の東微北に飯豊村なる所あり」(柳田國男編遠野物語四二)又飯豊村の若者のことを、飯豊衆と呼ぶことが同書に記されてある。

前掲飯土用村は福島縣白河町の北方約二里位の所にある。更にその東北三里位の所には「飯豊」なる地名があるが、何と讀むか分らぬ。私は曾つて福島縣に飯豊村なる所があることを聞いたことがあるが、此處と同一地かどうかは分らない。

岩手縣和賀郡に、飯豊村・飯豊川なる名のあることを地圖上で發見したが、之も何と讀むかは分らない。

(五) 私の愚考を次に述べよう。「イヒデ」は、「飯出」で、米の出る意である。それが米が豊なる意に變じて、飯豊と書く様になり、讀方は元の儘イヒデとなつて居るのではあるまいか。それは飯豊山の如く、山中に濕地に富む所は、田を聯想させるからである。(苗場山の如きもこの例と思はれる。)

或ひは「飯豊」の山から流れる水は、その豊富な雪の故に常に絶へず、稻を良く實らせる故かも知れぬ。これは山麓にある長者ヶ原の名に示す様に、兎作に見舞はれること少く、長者の住む場所と云ふのと相通ずる。

以上の如く「稻を産する山」或ひは「稻を豊に實らせる水の出る山」を「イヒデサン」と呼び、之を「飯豊山」と書く様になつたのではあるまいか。

しかしこの山が信仰の對象となり、この地名が東北各地に分布したのではないかと思ふ。その故にこそ、イヒデサンとも呼ばれ、イヒトヨサンとも云ふ。そして宛字が使用されることもあつて、その益々分らなくなつたのであらう。

以上は全く私の臆説に過ぎない。こんな所に書くには、餘りに材料が少いのであるが、此方面の知識が餘り顧みられてない様に思つたので敢て記した次第です。

飯豊神社について調べ、更に飯豊講の由來を追つたならば、面白い結果があるのではないかと思ふ。諸兄の御意見なり、御批判なりを切望すると同時に、實證的な説の發表されることを期待する次第です。

(註) 筆者上田君は今秋學窓を出て十一月一日入營の多忙の際これ以上調べる餘裕が無かつた事を苦にしてゐる、敢て一言代つて辯じて置く。(一八、一〇、一六、沼井)



信 通 員 會

立山へ修練行

沼倉寛二郎

私共の店で集團修練行をやる様になつてから、やつと三年を迎へる事になりましたが、幸に年々増加を辿つて居ります。今夏は行内の半数以上の参加を見まして、主催者として洵に嬉しい様な一方責任の重大なる事を痛感致しました。数名を除いては山には全くの未経験のものばかりで、それに修練行と言つても銀行の都合で土曜日曜かけての無理な計劃を強いますので、尠からず心配の種でありました、

豫定の七月廿四日(土)超満員の車(六月より稻荷町始發運轉富山驛側地方鐵道で連絡あり、晩くも來春迄富山驛より栗巢野行直通を見る等)へ更に貨物でも積み込む様に押込められて酷暑と共に栗巢野着ではすつかり消耗した體でしかありませんでした。加へて炎天下に晒されたせいか八丁坂にさしかゝる頃のびさうでしたが、激勵と準備運動が物を言つてか追分を過ぎる時は數人を除いて漸次快調となつて豫定より早く天狗小舎に全員元氣にて入る事が出来ました。途中昨年も同様でしたが今度も弘法追分の小舎で飲料水に困つてゐたので、ですから、姥石の冷泉は何時も私共の良きオアシスです。

山は例年より多い残雪に夕映える様は何時も乍ら素晴らしい景觀を展べて呉れました、殊に紫色を帯びた夕暮が青空の上に巍然と摩する剣には相變らず堪らない魅力を感じさせずには置きません。恵れたこれ等自然の美にしたるだけでは幸福な私共は、食後冷えきつた草原に車輪坐になつて寒風に和して木霊す合唱は逆も印象的な何かしら神々しい響の様に思はれました、私共の合唱でこんなにも素晴らしい經驗をした事はありません、雰囲気は飽くまでも日本的なもの

を呼び之によつて高く深い情緒を涵養せずには置かない素晴らしい收穫になりました。一同神秘的な環境に参入した形です、興奮は仲々醒め様とは致しません。小舎は團體客で超満員特に豫約して貰ひましたが、やはり相客で横になる餘裕とでもありません、一睡の出来なかつたのも鍊成の一つとなりませう、翌廿五日三時過ぎ至極輕装に出發途中残雪に驚かされ四時頃室室で小休止夏にしてこんなに身にこたえる寒さはどうしても十二月頃の氣温です、二三のブレイキに苦心しましたが割合容易に六時頃全員頂きに立つて歡喜をわけ合ひました、頂上は更に寒く今にも凍りそうでした、夏山で雨降り以外この様な身震は始めてのよき體驗であります。

歸路は淨土の中腹より豫定を變更して地獄谷を廻りました、ミクリガ池で小春日和の氣温に恵れ體が始めてすく／＼とした氣持でした。惜氣もなく露出して岩壁の剣は陽に照されて飽くまでもドス黒く輝いて心を強く捉えてか瞬時に親しい友丈けだつたら直ぐでも岩に飛び込むで行き度い衝動にかられるのをグツト抑へ、残雪の雷鳥澤を横背に觀賞しながら鍊成行としては極めてのんびりとした散策になつてこの行程では一番愉しい一時でありましたでせう。

天狗の小舎で十時半朝食にしては遅い食事を済まして大休止後一睡もしなかつた一行としては極めて調子のいい出發の様でした、追分まで小憩後は弘法小舎など見向きもせず元氣に八丁坂を降りる時ホッ／＼と降り出した雨は稱名ホテルに着く頃には本降りとなつて仕舞ひました。茲で中食を攝り、一時晴れたと見えましたが出發の四時近く又復ドシャ降りとなりましたが、禍が却つて幸となり、(落伍者もなく)素晴らしい調子がより上り六時前には一塊となつて栗巢野になだれ込み團體鍊成の成果を遺憾なく發揮、斯くして今夏も順調に私共の企が滞りなく幾多の尊い體驗を得まして終りましたが、これは三週間の準備體鍊で年齢を超越して調和を整へた賜かと心私に悦び居りますと共に愈々絶望的な決戦下に於ても至極身近に斯の如き修練道場に恵れるの私共は洵に幸福であります事は御校威の然らしめるとは言へ、唯感激の他ありません、我々は山を通じて體を鍊り職域奉公の誠を盡し以て聖慮を安んじ奉り且つは護國の英策に對しても誓つて米英撃滅のため邁進致し度いと存じます。

尙参加人員
十八年 卅餘名

内 (男) 十二名
(女) 十九名

十七年 廿七名
内 (男) 十六名
(女) 十一名

十六年 十九名
内 (男) 七名
(女) 十二名

吉野から熊野へ

川喜田壯太郎

清水谷での小集會のとき茨木さんから奨められたことも手傳つて

かねてから一度越えて見たいと思つてゐた伯母峯から北山に入り北山川を筏で下つて瀬から本宮へ、更に、十津川筋を溯つて五條に出ようと云ふ考へで、八月二十五日の朝に伊勢の津を出發しました。窓染むる青田に瑞の大和路や、關急電車を大和上市で下り、柏木で晝食をすまし、午後のバスで伯母峯を越えました。谷が深くて快的でした。大普賢の峯々が亂雲と夕照に混然と生きもの様に立ちふさがつてゐました。午後のバスは河合止りでした。こゝは物資の不自由な山村で宿も行届かず、家の様子も木曾邊と同じ様で、殊

更の特長も氣付きませんでした。翌日は、また昨日と同じバスに乗つて早朝出發しました。朝露はしとしと草刈り乙女かな

途中に池と云ふ高地があり、蕨温泉あたりの沼を思ひ出す様な美しい處でした。この日は北山川を筏で下つて大沼泊りの豫定です。普通は池の少し先の浦向から不動峠(六五七米)を越えて大沼へ出、そこから瀬へ下るのですが、私共には別仕立の筏が用意されてゐたので、バスを小口で乗換へて土場まで行きそこから筏に乗りまし

山雨きて我も裸の筏乗り



岩に掠る筏ときそひ粘る

晝は神川村で心づくしの鮎料理の御馳走になり、夕餉は大沼の宿でうまい鰻にありつきました。この日の筏乗りは話にきいた程危険なものではなく、のんびり山雨にけぶる谷間の景色を味ひました。

その夜中から大雨になり、翌朝は水の音に起されて、とにかく筏場まで行きましたが、とうてい問題にならず、瀬まで川沿ひに歩いて、その先の船が當てにならないので、むしろ、川の止まらないうちに、三重縣側に渡り西山からバスで阿田和に出て、海岸沿ひに新宮に廻り、更に宮井まで熊野川をバスで上つて午後の本宮行のプロペラ船をとらへる方が安全確實と決心。このコースをとりました。降つては止み、止んではまた降るこの天氣に、十津川の増水を氣にしながらその夜は小栗判官の傳説で名高い湯の峯の宿に泊りました。

判官の湯けむり夏のおぼろ翌朝まだ降つてゐました。十津川を上るプロペラ船は出ないし、

その上、景色も信州邊と違つて變化に乏しく、どこへ行つても同じ様なで吉野熊野の谷間はもうこれでわかつたと一人決めて南紀の海岸へ出てしまひました。



帳 抜 切

支那西北地域開發事業

(本邦財界情勢より)

我國に於ける優れた經濟調査機關の一として知られてゐる三菱經濟研究所の刊行に拘はる「本邦財界情勢」(本年五月號)に掲載された「重慶政權の西北開發」といふ一文は、重慶政權が米英ソ聯等の援助と右地域の開發による抗戰力充實に多大の努力を拂つてゐるのであるから我國にとつても極めて關係の深い事柄と思ひ、その主要部分を、少し長くなつたが、左に轉載した。適宜文章や數字を簡略したり、組立を變へたりした點御許しを願ひたい。又括弧内は私が書入れたものである。

西北地域開發計畫の效果に就ては「早急なる結論は慎むべし」と言ひ又その「餘りに尨大架空的なるに驚かざるを得ぬ」と右記事にもあるが、その實狀と詳細を知るに必要な資料が入手出来ない以上將來の見通しはつきりつかないわけである。又彼等の發表なるものも直ちに信用することが出来ないことは現在世界各國(我國以外の)の發表に於けると同様である。

この廣大な地域の大部分が乾燥地乃至不毛の地であり且又運輸の發達が困難である點等から開發事業が長年月を要する容易ならざるものであつてその成果に疑問を持つものも多い。最近に於ても背後に中共の存在する民族運動性格の反抗が妨害してゐると報ぜられてゐるが(七月一日付諸新聞参照)決定的な故障に遇はない限り支那民族の強靱性から見ても進捗するものと思はれる。最初架空的と評せられたソヴィエト聯邦の各種開發計畫が或程度又はそれ以上の成果を納めて來た例をきいてゐるやうに、その意外に速かな進捗を見ないとは限らない。殊に「戰爭」は屢々平時には到底考へられない又考へようとなしな事柄を遂行させる。しかし、假令西北地域開發が計畫通り行はれたとしても全然海を持たない地域である以上、抗日地域として有力にならうとも、有力な獨立國家としての將來性には乏しいと思はれるが、支那統一(重慶政府壞體後)の曉に於ては重要な地域となるものと考へられよう。同時に世界開發史にその名

を残すことになるかもしれない。

この管では高度の文化の發達を、爾來久しく荒廢、世界の邊境としてのみ人々に知られ、近年は政治的理由より入國の著しく困難となつた、又一度入國し得るとも再び脱出する事が更に至難であると言はれてゐた、この地域に對する我々の興味は從來經濟及び軍事上の方面からよりも寧ろ探検的な方面からであつた。いや、興味といふよりも特別の魅力を感じてゐたのであらう。私もこの地域への探検記の數篇を読みその二、三の紹介を「會報」に寄せたことさへある。「神祕とロマンスとの細道が北京、ウランバートル、ラサ、カシニガルに通じて遙か地平線の彼方にまで續いてゐる」とはタイクマンの「トルキスタンへの旅」の最後の文章にある言葉であるが、これらの神祕とロマンスの細道も、今や軍需資材と労働者と技術者とを又政治家と軍隊とを運ぶ大道として世界の真正面に現れ出でやうとしてゐる。

（田邊主計）

▼重慶政權が現下最大の努力を拂つてゐるのは奥地を開闢して經濟力を強化すると共に外部との連絡を保ち抗戦力低下を多少なりとも喰止めんとしてゐることと之が如何に重視されてゐるかは蔣介石

が「西南を抗戰の基地とし、西北を建國の基地とせん」と叫んでゐることによつても看取される。

（西北地域とは陝西、甘肅、新疆の三省を含むもので重慶の在る四川省から見れば甘肅省はその北に隣接し寧夏省と青海省との間を西へ細長く延びて廣大な新疆省につながつてゐる。陝西省は四川省の北、甘肅省の東に隣るものであ

面積(千平方里) 人口(百萬)

陝西省	一九五	八・〇
甘肅省	三八〇	四・七
新疆省	一六四一	二・〇
江蘇省	一〇五	二五・八

（註）中國經濟年鑑一九三四年に據る。

江蘇省數字は西北三省の人口稀薄、耕地割合低率なるを示すため参考に掲ぐ。

▼産業の概観

主要産業は農牧業であるが農産物は米よりも小麦を主とし雜穀も多い。何れも陝西省が最多。他に棉花、煙草を産出。牧畜では新疆省の羊が最も注目される一支那全土の一七％。

森林面積の總面積に對する割合—陝西一六％、甘肅六％、新疆五％（全國平均八％）。地下資源は極めて豊富と言はれるが全貌は明かではない。中國年鑑に據れば石炭埋藏量は陝西七一、九五〇百萬噸

つて西北地域以上三省は支那中央を東西に貫くものであるが、全く海を持たぬ遠く海から隔つた地域である。新疆省最西部はバミール高原に接し、タクラマカン沙漠の南、阿爾泰山脈、崑崙山脈に西藏と接し、北はソウイェート聯邦と蒙古人民共和國とに接してゐる。）

一方耕地面積 一方耕地面積並全面積に對する比率

當人口	千ヘクトール	％
陝西省	四一・二	二〇・五
甘肅省	一二・三	一四・五
新疆省	一・二	八四・一
江蘇省	一〇五	五・一

全國の二九％、甘肅、新疆は共に六、〇〇〇百萬噸、鐵は三省の埋藏量二〇百萬噸、石油は三省共に存在（支那の石油資源は未だ開發されてゐない。陝西、四川、甘肅、新疆の各省特に陝西省には相當な油田があり嘗て米國地質調査所は支那の埋藏推定量二二七百萬バレル即ち世界埋藏量の二十分一、米國の三分一と調査したことがある。）其他新疆省では金、白金、銅、石膏、硝石、硬玉等を産出。之等鐵山は何れも舊式土法採掘を

主としてゐて能率悪く且又輸送困難な爲め運輸費が増大する。工業は極めて未發達。新疆ではソ聯援助によつて工業振興が漸く緒についたばかりである。

▼貿易は主として新疆ソ聯間に行はれてゐる輸出の八割は羊毛、皮革、生畜等の畜産品であるが金額は一九三五年輸出二千萬留輸入七百萬留であつた。

（以上概要であるが新しい數字が判明しないから物足りない）

▼開發事業

一九三三年の全國經濟委員會は西北開發を重要課題の一として取上げ之より漸く具體化して來たが同時に之は蔣政權が邊境にまで及び始めた證左と見られる。即ち一九三四年には民生國防と國內移民とを二大目的とする西北開發調査が行はれ、西北辦事所開設とその活動開始によつて陝西に於ける開拓、棉產改造、甘肅の畜牧改良、黄河上流の保安造林等の諸事業に着手、更に西安には近代紡績工場、設立も見られ、農業金融のたゆの合作社も一九三五年陝西六七一甘肅三三に及んだ。

かゝる事業は日支事變の勃發によつて拍車をかけられ敗退と共に特に奥地工業問題として重視された。最近の開發事業を見れば、一昨年（一九四一年）八月蘭州に開

催の第十一回全國工程師學會はその契機と見られて各種の視察團の派遣となつた。一九四二年未決定の西北開發十ヶ年計畫は農工、交通運輸、教育衛生施設の改良、特に新甘陝の石油資源開發、セメント、製紙等の増産、鐵路、公路の擴充、植林等が主要課題であり昨年末の十中全會は西方開發特殊機關設置と十八年度開發豫算四億元計上を決定、西北水利管理局設立により運河開鑿、鑿井による西北綠地化を計畫中である。

右に對する人的資源としては技術者の全國的動員、労働力として膨大な移民計畫を建てた。（中央社の報ずる處によれば移民促進につき第一回移民として新疆省哈密一帯に二萬人を屯墾せしめんとし近く實行に移ると言はれてゐる。地方行政簡素化のため生ずる餘剰官吏等は西北開發に當らしめやうとしてゐる。——東亞旬報第四八三號參照）更に物的要求としては二億五千萬弗の對米借款を交渉中であり更に最近西北地區資源委員會を設置、ロツシング・バックを團長とする米人農業視察團も新疆省に向け出發したと傳へられてゐる（本年四月出發）。（又、昨秋の西北工業視察團に引續き本年六月組織された西北建設監察團の一行は北部新疆省調査を終へ九月一日より

同省南部を調査してゐる——東亞
旬報第四八三號參照)

▼現下最大の問題である交通に
就て略記すれば、西安より中央ア
ジアに至る「綏路」は事變前の開
發と共に擴張に着手された。一九
二一年—三一年の十年間に建設改
修されたものは甘肅省二七〇哩、
陝西省三〇〇哩。迪化政權三ヶ年
計畫の第一年に完成した自動車路
七〇〇〇軒である。一九三九年重
慶交通部は蘭州を中心として車輛
通行可能公路延長六〇〇〇餘軒に
達したと發表してゐる。

昨年(一九四二年)六月には甘肅
川陝水陸聯運總管處を設置、水路
連絡の調査に着手。更に蔣介石は
十ヶ年經濟再建計畫の提案に於て
一二五〇〇軒の鐵道敷設、二十二
萬臺の自動車、一萬二千臺の輸送
機を目標とすると述べた。隴海線
を西方に延長してトルクシブ鐵道
と結ぶ大西北鐵道、天水と成都と
を結ぶ天成鐵道とはその中の主要
なるものである。

現在利用されてゐる主要公路は
左の七路で何れも幅三—五米、自
動車通行可能である。

甘新公路(蘭州—瓊峽) 軒

蘭西々 (々—西安) 一一七一

甘青々 (々—西寧) 七〇四

華双々(華家嶺—双石鋪) 四一一

旬報第四八三號參照)

鳳漢々 (鳳翔—廣元) 四三二
漢白々 (漢中—湖北省白河) 五二九

平寧々 (平涼—寧夏) 三四〇
右の外甘州公路(蘭州—四川省)
八八〇軒は完成近く蘭寧公路(蘭
州—寧夏) 五五二軒も着手中であ
る。

蘭州とソ聯を結ぶ公路はトルク
シブ鐵道のアルマータ驛又はセル
ギオール驛から伊犁、烏蘇、迪
化、哈密、瓊峽を経由する二七
三〇軒のものがより更にオシ驛か
らタルドウイク峠を越えて新疆省
に入り阿克蘇(アクス)を経て哈密
に出るものも完成。之等の公路の
設計建設は全くソ聯技師の手にな
り輸送は總てソ聯製トラックを用
ひた。

鐵道は現在寶鶏、蘭州の一部開
通、新疆省では塔城、伊犁より迪
化、哈密を経由して甘肅に至るも
のを建設中といはれる。(然し、重
慶より哈密に至る二六〇〇軒は現
在約四ヶ月半の長旅を要するとい
はれるのであるから並大抵の事では
なく又支那が如何に廣大である
かを語るものである。目下この區
間に八十餘ヶ所の驛站(宿場)を設
置中(九月中完成豫定)であるその
大なるものは食堂、宿舍、浴室、
日用品賣場を備へてゐる——東亞
旬報第四八三號參照)

▼新疆省は民族十三種、人口の
過半は回教徒たるウルグイ人が占
めてゐる。回教王公統治は一八八
四年の省制により覆へされ爾來回
教徒の反亂時代となつたが一九三
四年の盛世才の專制により一先づ
安定。盛世才の迪化政權はソ聯の
援助によつて一九三六年より三ヶ
年經濟建設計畫に着手。病院、學
校、道路の建設、資源の開発、都
市の近代化、皮革、製粉、紡績工
場等の建設、發電水道事業等を興
し更に一九四〇年からは第二次三
ヶ年計畫に着手した。

ソ聯は迪化政權を樹立して自己
の傀儡としたもので、通商條約に
より武器の援助と共に經濟進出を
計り、政治、軍事、經濟、教育あ
らゆる分野に支配權を獲得した。
かゝる西北地區に對するソ聯勢力
の進出は國共合作により一應の諒
解が得られてゐるとはいへ、重慶
にとつては默視し得ぬ處であり、
之が中央化工作は從來も屢々試み
られてゐる(重慶と中共との關係
とは依然困難なものであり、中共
が延安を中心に西北支那に地盤を
固めてゐる限り抗戰支那の統一は
困難であり西北開發も思ふやうに
は出来ないといはれてゐる)。
獨ソ戰によるソ聯の支那援助力
の減退(最近ソ聯の新彊省撤退と
を傳へる記事が新聞に出てゐるが

實際はよく解らない)と、日米開
戰による米國の支那進出が目立つ
てゐる。即ち、米國は成都、蘭州、
迪化三領事館を設置、ウィルキー
の西北視察、バックの新彊農業視
察、陝西油田開發計畫、西北航空
基地建設計畫等をあげる事が出來
る、これ等による米ソ勢力の係争、
重慶の對回教問題、對中共問題等
幾多の政治的困難がこの西北地域
開發事業上におほひかぶさつてゐ
るのである。

池谷小屋

今冬閉鎖す

富士山五合目池谷佐十小屋は例
年冬期も營業して登山者に便宜を
與へてゐたが、佐十君は昨年來中
風を病んで半身不隨となり、爲に
今冬は同小屋を閉鎖せざるを得な
くなつた。尙昨冬は小屋に寝具燃
料を置いて盜難等の厄にあつた爲
今冬は右の一切のものを下してし
まう由で、今冬吉田口經由の富士
登山は著るしく不便となつた。(松
方三郎氏調査並びに報告)

會員池野成一郎氏

池野成一郎氏(大正元年九月入
會、會員番號二九八番、學士院會
員、東京帝國大學名譽教授、理學

博士)は本春來老衰の兆あり癡癡
中十月四日大塚の木村病院で逝去
された。享年七十八歳で大平晟氏
逝去の後は本會々員としては最高
年者であつた。氏は植物學者で登
山にも趣味を持たれ「山岳」も晩
年に到る迄愛讀せられ、昨秋に
は残つて居た「山岳」の製本を濟
まして喜んで居られた程であつた。
高齢とは言ひ乍ら今卒然として逝
かる。本會は謹んで哀悼の意を捧
げるものである。

會員田中喜左衛門氏

田中喜左衛門氏(明治四十一年
三月入會、會員番號一四六番)は
チブスにかゝり八月中旬より臥床
療養に努められたが遂にその効な
く十月六日午前十一時半逝去され
た。享年六十七歳であつた。氏は
京都にあり、三高出身者その他の
岳界後續者の指導後援に盡力せら
れた。本會は氏の逝去を深く惜し
み哀悼の誠を捧げるものである。
尙葬送は故人の遺志により九日近
親のみにて菩提寺福田寺にて營ま
れた。

誤植訂正

前號西岡氏文中第三頁二段終か
ら二行目及四段終から十一行目
三、高型 三、六型
正 一、尺八寸 誤 三、尺八寸
登山報國 登山報告

會務報告

九月常務役員會報告

九月十五日午後七時於事務所開會（八月ハ役員會ナシ）
出席者 横、島山、高頭、沼井、木村、小原、織内、小野、田邊、谷口、塚本

委任 木暮 外十一名

議長 横理事

一、會費變更ニ關スル定款改訂ニ付當局トノ折衝經過ニ關スル件
横長ヨリ

（イ）右ニ付當局ト折衝中、大日本體育會ト本會ト兩立スル

以 双方同ジ様ナ目的ノ團體デハ當局ノ立場上困ルコト

（ロ）ヨツテ本會定款中ノ目的ニ關スル項ノ一部ヲ改訂セラレタイコト

（ハ）定款改訂ハ明年度通常總會ニテ決定シテ差支ヘナキモ、當局ト本會トノ間ニ右了解シタル旨ノ申合セ事項ヲ作成スルコト

（ニ）會費變更申請ハ許可スル當局ヨリ右ノヤウナ申出アリタル事其他ノ交渉經過ニ付説明アリ右交渉ニハ主トシテ加藤、兼松、塚本ノ三名アタリタル旨報告意見ヲ求ム

右ニ付、本會存立ノ根本ニ抵觸セザル限り定款ノ一部改訂ハ差支ヘナシト決定

一、會費納付ニ關スル規定中ノ字句一部改訂ノ件
右規定中第三項「前項但書ノ場合ニ於テハ」ヲ「右ノ場合ハ」ト

訂正ス

一、神河内堰堤ノ件

新聞紙上ニ見エタル右ノ件ニ付實狀ノ調査ヲナスコト、右ニ關シ兼松幹事ノ農林省方面ヨリ得タル材料ノ報告アリ、現在ハ尙地質調査中ニテ、工事ニ着手スルコトアルモ數年後ナルコト判明セルモ、尙各方面ヲ打診シテ善處スルコトトス
一、入會申込者 十名入會承認以上

會員消息

木暮會長 本會々々長木暮理太郎氏は少しく健康を害され、概ね自宅にて執務中。經過良好。
栗原和輔氏 厚生省研究所國民體力課勤務となる。
藤島敏男氏（日本銀行熊本支店長）支店長會議の爲十月中旬上京滞在セリ。

茨木猪之吉氏 十月中旬木曾、關西、九州と繪行脚に出掛く。
石橋正夫氏 資源科學研究所員より母校北海道帝大理學部へ轉任
織内信彦氏 勤務先の名稱變更、全國農業經濟會食糧部食糧課勤務となる。
桑原武夫氏 大阪高校教授より東北帝大助教に轉任。

登山家のための山岳書庫

（小店の特約販賣）

◆日本山岳會刊行書

◆山と溪谷社刊行書

◆朋文堂山岳専門書

◆愛岳家憧憬書多種

◆參謀本部發行地圖

東京唯一の山書専門店
全日本各登山團體御用

山の家書店

日本山岳會々員 安藤 武

所

東京都本所區厩橋三丁目二七番地
（都電吾妻橋一丁目下車南へ五丁）
振替口座東京一〇三〇六〇番

編輯後記

本號は十月十一月合號になりましたが毎月出せるように、それも八頁に減らさず十二頁で続けたいと願っております。急に涼しくなり東京でも朝晩に温度が十度以下に下るやうになりました。山も高い處はもう雪が降つてゐるでせう。身の引しめる秋晴れに、さすがに山の方へ想ひをはせておりますが

いつ出かけられるか解りません。今までの山歩きを次々に想ひ出してゐます。まづ将来にのぞみを持つことですが、また過去に楽しい想出がなかつたとしたら随分味気ないものでありませう。これから十二月號を組立てます。その次はもう御正月です。どうも月日のたつのが早く、殊に此頃は毎日追かけられてゐるやうな心地でおちつきません。

(田邊主計)

昭和十八年十月十三日印刷納本
昭和十八年十月十五日發行
頒價 二十錢

日本山岳會内 編輯者 田邊 主計

發行所 塚本 繁松

東京都芝區平野町(不二屋ビル) 發行所 法人

電話(芝)一六四九 振替東京四八二九

東京都神田區佐久間町三ノ三七 印刷所 株式會社 文唱堂印刷所

電話下谷四七九五 會社番號 東京三三一七

東京都神田區淡路町 配給元 日本出版配給株式會社

山と溪谷

第82號出來、創刊以來十五年の歴史を有する本誌は決戦下唯一の山岳雑誌として倍々重きを加へ、更に今回用紙増寛の特典に浴した爲、從來入手難の讀者はこの際書店豫約、又は直接本社御注文頂へれば御入手出來ます。82號要目一行軍登山への道、南嶺の山、亞高山島の寶庫尾瀬、極地探險家列傳、近畿の山、バタアン陷ちてより、アラスカの山、岳人辭典、マダガスカル紀行、山人の傳統、東北の山、山の怪異、伐採と炭焼、荒海山南壁登攀、九州の山、乗鞍岳の猿酒、その他滿載(1部.70 送.08 年極6部 4.20 送共)

槍ヶ岳へ

塚本閑治著、日本山岳寫眞書第五篇、原色版口繪入り、大好評發賣中(賣價 2.50 送.08)

岳(たけ)

川崎隆章編、名家山岳隨筆集、百名家合筆の詩、歌、句、繪、文に由る山の再現、原色版口繪入り、大好評發賣中(賣價 3.80 送.15)

丹澤山塊

塚本閑治著、日本山岳寫眞書第六篇、原色版口繪入り、十二月中旬發賣(賣價 2.50 送.08)

登 拜 頌

藤木九三著、石井鶴三裝幀、決戦下岳人の戦意を昂める書下し論說隨想九篇に新作詩四篇を加ふ。上

質コットン紙使用、十二月中旬發賣(賣價 2.93 送.15)

赤城の四季

猪谷六合雄著、A5判アート刷に上州の名山赤城の四季の名寫眞を展開した待望の豪華版にて、志賀

直哉、里見淳、長與善郎、關口奏四權威の隨想を盛る、一月中旬刊行。(賣價 6.00 送.20)

上越國境

塚本閑治著、日本山岳寫眞書第七篇、原色版口繪入り、中村謙氏解説。

(賣價 2.50 送.08)

山岳渴仰

中村清太郎著、原色版口繪二葉、序小島烏水、木暮理太郎、跋田部重治、裝幀著者、山岳の神聖を繪

と文に由り描く中村氏の處女作愈々成る、一月下旬刊行。(賣價3.00送.15)

★本社出版物は書店申込み又は直接本社へ・山溪出版月報進呈★

東京都芝區 山と溪谷社 電話(芝) 5 4 3 番
田村町 6-4 振替東京 60249番

キスリング型(E式)

ルツクザツク



御手元にある布地御持参になれば
御調製申上げます

山とスキー具専門

東都最古の専門店

東京都神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(3)三二一〇番
振替口座東京九一一八四番

店主 片桐盛之助